寺報
善巧（センケウ）

発行
〒938 富山県下新川郡
宇奈月町浦山497
白雪山 善巧寺
☎宇奈月(07656)(5)-0055

## 寺ごよみ

### 七月

一日　お講　音沢
八日　うらやま日曜学校
一三日〜一四日　夏の夜の一泊法座
京都の本山伝道院の実習生と講師の先生がこの日来院されますので、例年行っております一泊聞法をこの日に催します。
おつとめは一三日午後八時から浦山、下立、愛本、下村、栃屋のおつとめ勉強会の皆さん、それに善巧寺婦人会の方々が一堂に会して「お正信偈」を。このあと伝道院生と講師の先生の法話をたまわり、本堂で一泊。翌朝は五時からおつとめと暁天講座がひらかれ、お日中は十時から。一泊聞法に

一四日〜二〇日　永代祠堂会　ひきつづき一四日午後一時からは永代祠堂会。講師は里村了学師。なお期間中のくわしいご案内は六ページに。

新しく出来た集会所御内仏の荘厳

七月十四日〜二十日迄
# 永代祠堂会
法話　里村了学師

## 内陣法名——この一年

善巧寺のお内陣に第一軸目の内陣法名が懸けられてから丁度一年になります。寺としては始めての試みで、門徒の皆様への反応を気づかって居りましたが、案ずるより産むは易し、此の一年で、百十一の法名をお受けし、第一軸は完全に埋められました。第二軸の第一号も、近く受付けられることでしょう。

三日市の表具屋から新装のお軸が届き、墨をすり、新しい筆で「南無阿弥陀仏」と、真中に謹書した時の思い出が新しく蘇えって参ります。昨年の祠堂会には此のお軸の前で読経させて頂きました。私達の主旨に賛同して下さった方々が次々と内陣法名を申し出て下さいました。一人一人のお方々の法名を書き誌すたびに、色々な思いが私の胸を去来致しました。第一号は浦山新の鬼原さんでした。昭和十七年三月二十日に亡くなられた繁次郎さんの釋　義隆と言う法名です。昭和十七年は、私は、未だ浦山に帰って居りません。従って繁次郎さんは覚えていませんが、当主、勝次さんは、善巧寺の総代でもあり又、新しい建物に、新しいお内仏一式のための多額の寄附をなさった方です。此の方が、第一番目に申し込まれたのも、御因縁と言う他ありません。そして、第一軸の最後に法名を書かせて頂いたのは、昭和五十四年五月十九日に長寿を全うして逝去なさった栃屋の野畑市右衛門さんです。法名を、「唯念」と申します。野畑さんのお名前を知らぬ人は、善巧寺門徒の中では、一人もいないだろうと皆んな言って居ります。一生涯、善巧寺と共に歩んだ信仰の人でした。此の方の法名を書きしるし乍ら、このような篤信の方々によって護られて来た善巧寺の美しい伝統を、心から有難く感謝した次第です。此のお軸に記された法名の中で、一番古いのは、明治三十八年三月十一日に亡くなられた釈勤的と言う方です。此の法名に就いても、私には、忘れがたい記憶があります。橋場啓次さんが富山市の収入役をして居られた頃、報恩講のお勤めに参った時に、橋場さんから聞かされた話で、お父さんは明治三十八年日露戦争に従軍して亡くなったということ、おじいさんに育てられたという話、そして、浦山のお寺を生涯忘れてはならぬと教えられた話。此のような経過の中から、内陣法名を申し出たと言うこと。このように内陣法名のお軸には、善巧寺の歴史と、御門徒の厚い志がこもっているのです。祠堂会には、誘い合せて御参詣下さい。

# 空と華と

明教院僧鎔伝

# 明教院僧鎔師と空華廬（二）

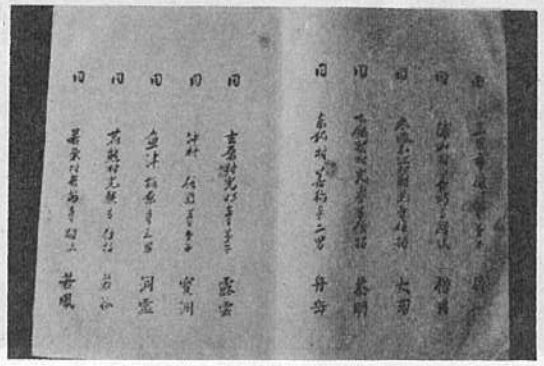
上市・明光寺 土井了宗師

僧鎔師は二一才の時に皆様方のお寺へ入寺なさいました。ですが、勉学の志断ちがたく、まもなく京都へ登り、第二の師匠僧樸師について学ばれることになりました。僧鎔という名に改められたのはこの頃のことと思われます。僧樸師も越中の出身で、やはり在家の生まれです。この僧樸師が僧籍に入られたのも不思議なことに、霊潭師が高岡で経典の講義をなさったのを聴講したことが縁となったものであります。僧樸師は学林きっての大教育者で、そのお弟子には、慧雲、崇廓、仰誓、大同、智洞、玄智、大麟といった錚々たる学者方がおいでになりました。僧鎔師はこれより四、五年前に自坊の善巧寺本堂の東隣に自分の書斎として甘露室という小庵を建てられました。ところが、光顔寺（魚津市吉島）の体仁師や、善称寺（入善町東狐）の知高師といった人達から、是非ともそこを開放して私達も一緒に勉強させて欲しいとの申し入れを受けました。僧鎔師は二度、三度と断わったのですが、あまりの熱意につい根負けし、書斎を開放し、「空華」の額を掲げることになりました。ここに学塾空華廬が誕生したわけです。空華廬への入門者は日々に加わり、やがて規律の必要にせまられました。そこで制定されたのが、「空華廬僧約・制法」です。これは写しが善巧寺に伝えられていますので、ご覧になった方もあると思います。僧鎔師三六才の春、宝暦八年の日付になっています。そこには、学仏の徒として遵守すべきことがらが細かく規定されています。そして、空華三会と言って春・秋・冬の三回講義が行われました。夏は、京都に登り学林の安居に懸籍しなければならないので講義はありません。

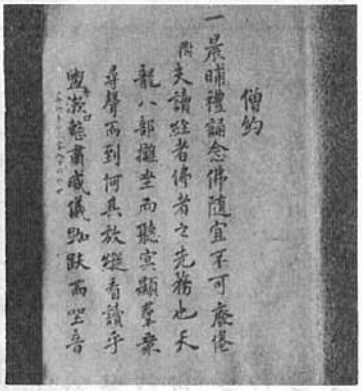
善巧寺に伝えられる「入門帖」によると、門弟の数は二三七名もありました。県内ばかりでなく東北、関東、近畿、中国、九州、北陸と全国から浦山の空華廬へ向学心に燃えた学徒が集まって来ました。しかも、僧鎔師が亡くなられてからも徳を慕い入門を希望する者が跡を断ちませんでした。こうした人達は墓前で入門式を済ませ弟子の一員に加えられました。滅後の弟子は六二名もあります。

過日の竜谷教学会議後の見学に善巧寺を訪れられた桐渓順忍勧学が僧鎔師の墓前に詣で、齢八三才にして漸く念願叶い空華の弟子に加えていただいたと喜ばれた姿が、今も強く印象に残っています。和上は人も知る空華学説の信奉者です。

第二の師僧樸師



空華入門帖



空華廬の僧約

## ――「入門帖」によると空華の門弟は当時二三七名もありました。――

## 寺ごよみ

### 八月

一日 **お講** 石田・生地・中新

四日 **うらやま日曜学校**

一一日 **うらやま日曜学校** そろそろ盆踊りも近いので、この日あたりから「しんらん音頭」などの練習会が、夜にも行われます。

一五日 **善巧寺こども盆踊り** 今年で三回目。きれいになったお寺の境内で夏の夜のひとときを心ゆくまでお楽しみ下さい。お父さん、お母さん、おばあちゃん、おじいちゃん、それに町から帰ってきた方々も、ぜひお越し下さい。

一九日 **善巧寺総代会**

三一日 **うらやま日曜学校** さよなら夏休み大会

# 明教院文庫誕生

新築の「甘露室」に、明教院の遺墨。そして本棚には、師の著書や講録がズラリ百冊――念願だった「明教院文庫」の誕生です。

この文庫は、師の二百回忌記念事業の一つとしてすすめていたもので、写真でご覧のように本棚にはたくさんの本がならんでいます。いずれも寺の経蔵や行信教校、竜谷大学の図書館、さらには京都の古書店などを五年がかりでさがし求めたものばかりです。

なかでも、寺の経蔵で昨年見つかった「観経定善義聴記」「大宝積経無量寿如来会聴録」は、それぞれ表紙に「空華丁亥秋会」「庚寅空華冬会」とあり、前者は僧鎔師四十五歳の秋の講義で、後者は四十八歳の冬に講じられたものである

ことがわかります。またこの書を筆記したのは長男の僧周師であることからして、浦山善巧寺の空華廬で父子ともども宗学研讃に力を注いでいたことがうかがえ、貴重な資料であると同時に親子のほのぼのとした情愛を味わうことができます。

このほか、師の代表的な著書のほとんどが書写本、複写本としておさめられており、僧鎔師の偉業を知る上でなくてはならない文庫といえそうです。

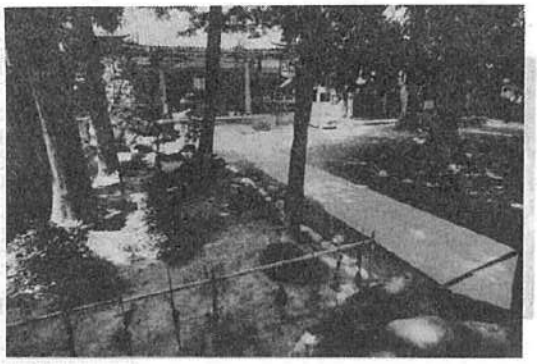
また、遺墨はこれまで、寺には「狂歌」が一幅しかありませんでしたが、高島法輪寺から、「今乗二尊教」の真筆を写させてもらい、門徒の川瀬達也、野崎与三治の両氏から、それぞれ一幅ずつ御寄進いただき、先日も遠く福井から見学にこられた学僧の方々にもたいへんよろこばれたことであります。

# 花と緑の境内

お寺の境内をうつくしくーと、前回の寺報でお願いしてからわずか三ヵ月の間に、ご覧の通り、境内は見違えるようにみどりいっぱいになりました。

県会議員の選挙の日でした。ひょっこり熊野の総代、岡田実さんに会い「土のあまったのないかなあ」といったところ「わかった」と快諾。明くる日にはもう一トン車が四台もきて境内は土の山。

宇奈月夢を語る会のメンバーが勤労奉仕で庭づくりをはじめると、三日市の大藪助雄さんが自転車でかけつけ、有馬土建にいただいた川原石でハドリをはじめ、次の日には早くも「うちの松を」「庭木ごっそりもってゆけ」の電話が。以来一ヵ月の間、大藪さんは休みなし。中新の尾沢さんからはじまって、生地の根塚さん、栃沢の開沢さん、中陣の大野さん、丸田さん、浦山新の鬼原さん、浦山の西中さん、若栗の立田さん…と軽四トラックで走りまわり、集まった集まったアカマツ、クロマツ、ゴヨウマツ、ラカン、モミジ、シホウチク、トショウ、イトヒバ、タマツゲ、サルスベリ、イチイ、サザンカ、ボケ、ツバキ、サクラ、コザクラ、ドウダン、ツツジ、シンパク、サツキ、ハス、キク、ダリア、ノウゼンカズラ、ムスカリ、スイセン、カノコユリ、ゼンマイ、クサソテツ、ハナウツギ、ハナズオウ…。



ざっと数えて六十種九十本の花木とさまざまな花が、境内いっぱいに植わりました。

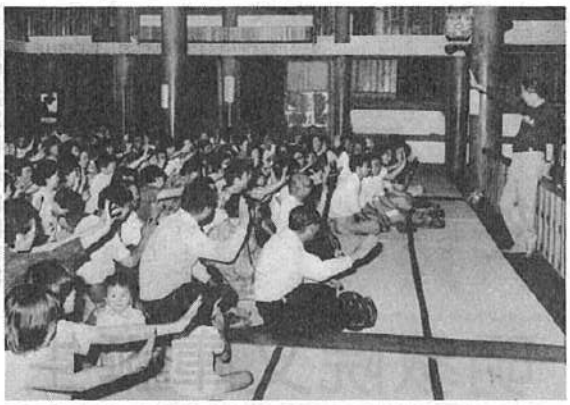
なかでも生地の根塚さん。庭で育てたゴヨウマツ。聞けば二十数年間、手塩にかけた見事な枝ぶり「持っていかっしゃい」といわれたものの、いざスコップを入れるとなると「あー」と深いタメ息をつき、つづいて両手を合わせてお念仏。「長い間世話になったのォ寺へいって大事に可愛いがってもらえよ」。そばで奥さんが「それにしても果報な木ですね。これからお寺で毎日お経を聞けるんですからね―」。「そいがじゃの―」。

スコップで土を掘り、根まきに精出す大藪さんも、二人の会話に心打たれ、しばしぼう然としたことでありました。

門信徒の皆さんのおかげで、本当にありがたい境内になりました。一本一本の花や木に皆さんの真心がこもっています。お参りになる方も、その心を味わっていただきたいと思います。

そして最後に重ねてお願い。入り口の石垣を寄せ植えの刈り込みに仕立てる計画ですので、どんな種類の木でもけっこう。余分なものがありましたらご持参、あるいはご一報下さい。

**永六輔サン** お寺で生まれた落語を、もう一度お寺で、つまりこれは本家帰り。今年もこの善巧寺で心ゆくまで本物の落語を楽しんで下さい。ところで今年は国際児童年。二年後は国際身障年です。体の不自由な人とも自由におつき合いできるように、手話をおぼえましょう。いいですか、ハイ、夕焼け小焼けで日が暮れて……。



**入船亭扇橋師匠**「なに、穴ン中に泥棒がいる。なんとかしておくれ、一両出すよ」「だめだよ旦那あっしのかかとに食いつくって」「じゃあ二両出す」「だめだよ旦那あっしの急所ねらうってそういってます」「仕方がない。じゃ三両札をするよ」(すると穴の中の泥棒が)「何？　三両？　三両なら俺の方で上がっていく」(穴泥)

# 爆笑野休み落語会

**入船亭扇好さん**「あアらわが君日も東天に出現ましませば、うがい手水に身を清め、神前仏前に御灯明供え、ご飯めしあがって然るびょう、恐惶謹言……」「なんだい飯を食うのがキョウコウキンゲン…あッ…、なら酒を飯んだら、よってくだんの如しだ」

（たらちね）

**柳家小三治師匠**「問答に勝った？　なにいってやんでえ。あん畜生俺の商売知ってやがる。手前んとこのこんにゃくはこれっぱかりだって（と手まね）いまいましいからこんなに大きいって。と十丁でいくらだって。五百だったらしみったれ坊主よ、三百に負けろてえから、赤ンべえ」(こんにゃく問答)

# にぎやか花まつり

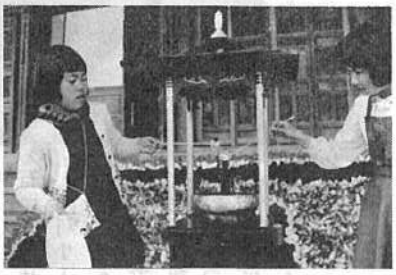
〝ワレラ仏ノ子〟――お寺に八万四千個のチューリップの花文字が、パーッと開いて、善巧寺名物〝花の初まいり〟が四月二十三日にぎやかに行われました。

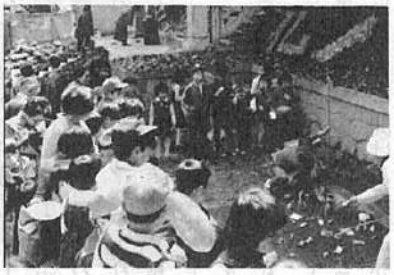
お釈迦様の誕生を祝い、合わせてわが子、わが孫の初のお寺参りのご縁をよろこぼうというわけで生まれたばかりのかわいい赤ちゃんから日曜学校の子どもたち、それにお母さんやおばあちゃん、カメラを持ったお父さんまで、田んぼのいそがしい最中でありながらたくさんのお参り。

初参式のあと、住職のおはなしがあり、つづいて日曜学校生徒の〝仏の子〟のハミングにのせて、かわいい初参りのこどもたちに、おじゅずが一つ一つかけられました。

縁側には、日校卒業生が贈ってくれたステキな〝花御堂〟と〝誕生仏〟がかざられ、みんなで甘茶をかけて、お釈迦様の誕生を祝いました。

そして花いっぱいの境内では、コンニャク、フーセン、輪なげの縁日があり日校生は大よろこび。お年寄りのためには午後から若院の法話もあり、春の一日、お寺は花の香りとお念仏のよろこびに満ちあふれておりました。





# 好評おまいりバス

善巧寺のおまいりバスが好評です。遠方の門信徒の方々が安心してお寺参りできるようにと、地鉄バスとタイアップしてこの四月からはじめたのですが、第一回の花まつりでは、田んぼのいそがしい最中にもかかわらず、入善、黒部、音沢、内山などから六十人近い利用者があり、ホッとひと息。

二回目は六月一日のお講の日。この日は大阪の利井興弘師の特別法座もあるというので、利用者はぐっとふえ、Aコース（浦山新、愛本新、栗虫、音沢、内山）は満員御礼で立つ人もあったほど。Bコース（上野、東狐、板屋、生地、栃沢、中新）もちょうど満席。

中には九十近いお年寄りが、お連れにかかえられるようにして乗ってこられた方もあり「めったにお参りできないのに、おかげで」とのことばに、はじめてよかったなあとよろこばせていただいています。

## 一泊聞法・祠堂会にも運行

**今度の一泊聞法、祠堂会では十三日の夕方からAコース（浦山新・愛本新・舟見・栗虫・音沢・内山）Bコース（上野・東狐・板屋・生地・栃沢・中新）を運行、十五日はあさからAコース、十六日はBコース、そしてお満座の二十日はABコース合わせて運行する予定ですので、おさそい合わせの上、せいぜいご利用下さい。**

## 住職日記

**六月二十一日　小雨**　五時起床、梅雨じめりの廊下越しに、小鳥の囀る声がする。洗面を終え、書斎に入る。十八日の落語会の際、中新から頂いたさつきの鉢の華やかな色彩が目に入る。花の銘を「しんらん」と云う。白に赤の斑の入った、どちらかと云うと小振りの花弁である。「さつき入門」の参考書には、一日三・四回灌水のこと書かれている。毎日の灌水が、私の新しい日課となる。

さつきは花期が長いから当分目を楽しませてくれるだろう。七時になると申し合せたように、選挙カーがやって来る。日が経つにつれ連呼の声にも熱が入って来るようだ。今日は学校の日。富山女子短大に週二回講義に行くようになってからもう十六年になる。創学以来の教授は、私を含めて、四・五名になっている。先日もらった学生名簿を見ると、善巧寺門徒の娘さんも何名か、名を列ねている。大学進学希望の女性は、年々増加しているらしい。八時四十四分発の急行に乗る。雨は上がっている。蒸し暑い。車窓から、色々な花を眺めるのは楽しみだ。栗の花が咲いている。泰山木の白い花が咲いている。立山連峰の残雪が、意外にはっきりと目にうつる。今日は、観光客は乗っていない。電鉄魚津から同僚の先生が乗車。富山迄駄弁って行く。

富山から、新湊行のバス。途中で道路工事に出会い、十時二十五分ギリギリに学校に着く。一年ドイツ語、予定通り進む。

昼食は持参のサンドイッチ。食後三十分の薬が、今日から変っている。血圧が大体落着いて来たので、変更するとの主治医の話だった。午後三時迄二年ドイツ語。よく調べて来ている。

予習をどの位やったかと聞くと、クッブリ三時間かかったと言っている。電鉄富山四時半の特急に乗る。此の電車には、何時も、何人かの知り合いが同車している。車中、売店で買ったスポーツ新聞をひろげる。年をとるに従って趣味も子供らしくなるらしい。プロ野球の勝負が、目下の私の注目の焦点で、ラジオで聞き、テレビで見、そして翌日の自宅の新聞だけでは足らずに、スポーツ紙の大げさな見出しに一喜一憂している。但し、昨今の阪神の連敗に意気上がらない。

「落語会の写真が載っていますよ」と同車の知人から、夕刊を渡される。成る程、一面全部に、数葉の野休み落語会の善巧寺会場の写真がのっている。夫々に、よくとれている。

就床九時。

梅雨じめり　脱ぎ棄ててある　草履　哉

勝送り　落語の客の　夏　姿

## 御内仏完成

表紙の写真でもご覧のように、寺のお内仏の荘厳ができあがりました。

ご本尊の六字名号は、親鸞聖人八十六歳の時の敬信の尊号の写しで鉄鋳でできており、これは関西の篤志家、中島文吾さんのお世話で、篤志家の広瀬精一さんからご寄進いただいたものです。広瀬さんは本山や全国の別院などに聖人の銅像や仏具を寄進されている方で、縁あって、善巧寺にもお願いできたわけです。

荘厳は浦山新の鬼原勝次さんより多額の特別懇志をいただき、仏具店に道具一式を注文、さらに内装金箔などは、魚津門徒の森岡木工所で調製したものです。

お内仏は新築の集会所にあり、祠堂会の折に入仏式をいたします。お寺参りの節は新しくできたこの素晴しいお内仏に是非両手を合わせて下さいませ。

# すてきな善巧寺婦人会

若い奥さんたちの心の輪を広ろげてゆこうという善巧寺婦人会は、ウブ声をあげた四月十八日から、毎月一度の会合を持ち、勉強し、語り合い、楽しくなごやかに、ふれ合いの尊さをたしかめ合っています。

勉強の内容は、おつとめ、お作法、そして若院の話。この三ヵ月は〝心の美容院〟ということで、女性が美しくなるためにはどのようなことをすればよいのかということがテーマ。みんな直接関係のあることなので受講態度は真剣そのものです。

中休みではお茶が出ます。前回からは人生の味わいを深めるためにも、舌を肥やさなくては―と、日本一のお菓子の由来をたずねながら賞味することになりました。

話し合いの時間には、いろんな質問がとび出します。法事のハウツー、お経の意味、もうすこし時間をかけると、人生の問いまで深められてゆきそうです。

メンバーは現在二十人ていど。六月二十九日の会合では、女優の浜美枝さんがゲスト参加。子育てについて一緒に話し合いました。まだ、善巧寺にこんな会があることを知らなかったという奥さんがいらっしゃったら、気軽にご参加を。七月の例会は九日午後八時です。

## 宇奈月夢を語る会

### ただ今会員募集

宇奈月夢を語る会の会員を募集しています。

この会は「ようこそ、ようこそ」を合い言葉に、会員同志が夢を語り合い、こどもやお年寄りによろこんでもらえる催しなどを、奉仕活動ですすめてゆくものです。

誕生してから二年目ですが、寺を中心に、春の花まつり、初夏の落語会、真夏の盆踊りなどを催して、多くの人たちによろこばれています。

現在は世話人がわずか六人で、会員を正式に募集するのはこれがはじめて。広く新川一帯の青壮年層に呼びかけて、いろんな催しに積極的に参加していただき、みんなで「ようこそ」の味を深めてゆこうというのがネライです。

あらゆる分野のより多くの青壮年の参加を願っております。なお入会金は一万円。例会は月一回。

新会員の初会合は、七月二八日午後七時半から善巧寺で行います。

## ひと口法話

「スプーンはおいしさを知らない」という意味のことばが、古いお経の中にあります。どんなごちそうが用意されても、スプーンはただ、お皿から主人の口へごちそうを運ぶだけの道具でしかないのです。

では、おいしさを味わうのはいったいだれか？それはもちろん味わう舌を持ったあなたです。でも、いかがでしょう。ほんとにわたしたちは人生のおいしさを味わっているのでしょうか。たとえば朝、目がさめる。（あ―あ今日も一日田んぼか…）（あーあ、今日も一日会社勤めか…）（いやだなあ、くる日もくる日もおさんどん…）こんなことを感じるようでしたら、あなたは人生のおいしさを知らない〝道具〟になり下がってしまっているのですよ。

先の一句の次に、対句として、こんなことばがあります。

「かしこい人は、あたかも、舌が料理の味をいち早く知るごとく人生のおいしさを、すみやかに知るものである」

かしこい人とは、お念仏によってチエの目が開けた人のことであります。

## 一泊聞法・永代祠堂会御案内

**期間　7月13日より20日まで**

〈一泊聞法〉

◇一三日　午後八時　（おまいりバス迎え）
法話　本山伝道院講師ならびに研究生

◇一四日　午前五時　暁天講座
法話　本山伝道院講師

◇一四日　午前十時　法話　伝道院研究生

〈永代祠堂会〉

◇一四日　午後一時　逮夜（バス送り）
◇一五日　午前十時　伝灯奉告法要御消息
◇一五日　午後一時　逮夜（バスAコース）
◇一六日　午前十時　お講中陳（Bコース）
◇一六日　午後一時　逮夜
◇一七日
◇一九日　午後一時　逮夜
◇二〇日　午後一時　満座（バスABコース）

永代祠堂会の法話は里村了学師

## 合掌

ちかごろお寺で、おもしろいことばが流行っています。それは、「言ったものがやりましょう」というものです。

「ありゃあ、若ハン、草いっぱいはやしとるぜェ」

「はい、よろしく」

「このへんに花の一株も植えんにゃあ」

「いいですね。待ってます」

「門前に掲示板作ったらどう」

「たのみます」

すべてがこの調子ですから、この三ヵ月の間に、寺はみるみるきれいになってきました。口を出した方々が手や足を運んで下さったおかげです。いままではこれらすべてのことを、なくなられた野畑市右衛門さんにおまかせしていたのです。その野畑さんは今はなく善巧寺は、あなたのひと言、あなたのほんの少しの奉仕の心で動くのです。

どうか、寺へ来て、気が付いたことは手足をそえてご奉仕下さい。